

大英博物館における「日本美術史」の形成 —20世紀初頭の変革を中心として—

彬子女王 (立命館大学)

現在、大英博物館の日本ギャラリーにおける展示と東京国立博物館の常設展示は、双方ともに同じような日本美術史の流れを系統だった作品を用いて概観している。このように、英国と日本における日本美術史への理解は、現在ほぼ共通のものであると言ってよいだろう。しかし、日本美術史が徐々に成立していった19世紀後半、両国の日本美術史への見解は異質なものであった。

日本国内において「日本美術史」と言う概念が構築されていく詳細な過程は種々の先行研究により明らかになってきている。しかし、同時期に西洋において日本美術理解がどのように進展したかについての研究は希薄であったように思われる。本発表は、1900年代の日本美術コレクションに対する大英博物館の施策を元に、日英両国が共通の日本美術認識を共有するに至った過程の一端を明らかにする試みである。

大英博物館の日本絵画コレクションの中核的役割を果たしているのは1881年に購入されたアンダーソン・コレクションである。約3000点に及ぶ本コレクションは、海軍省の御雇医師であったウィリアム・アンダーソン(1842-1900)が、約6年間の日本滞在中に蒐集したものである。アンダーソンがこのコレクションを元に、独自に日本美術史の枠組を築きあげ、英国のみならず日本美術史草創期の日本でも注目されたことは、先行研究が指摘する通りである。

本発表では、アンダーソンの死後、大英博物館の日本担当学芸員として活躍したローレンス・ビニオン(1869-1943)の二点の事績を中心に論じる。一点目は、コレクションの蒐集・整理・評価と日本からの専門的知識の導入である。彼がまずとりかかった作業がアンダーソン・コレクションを中心とする日本絵画コレクションの見直しであった。その作業に重要な役割を果たしたのが、当時大英博物館に出入りしていた日本人画家、鑑定家、美術商たちである。このような専門家たちから様々な知識を得ることで大英博物館における日本美術への理解が深められていったのである。二点目は、ビニオンの研究成果に基づく蒐集方針の転換である。彼の蒐集態度からは、日本人にとっての日本美術がいかなるものかを理解し、その日本美術史にふさわしい作品をコレクションに補充するという姿勢がはっきりと見て取れる。

20世紀における大英博物館の日本美術の研究姿勢は、新しい作品を補充し、不必要な作品を排除することにより、日本が正統とする日本美術史にそのコレクションを近づけてゆくという作業であった。本発表では、その過程においてビニオンとビニオンにかかわった日本人の活動を浮彫にし、20世紀初頭、大英博物館の中で「日本美術史」と言う概念がどのように構築されていったかを明らかにする。